

「台湾人」という意識

—若者のアイデンティティはどこから来たのか？ どこへ行くのか？—

伊 藤 恵美子

愛知東邦大学

「台湾人」という意識

—若者のアイデンティティはどこから来たのか？ どこへ行くのか？—

伊 藤 恵美子

目次

1. はじめに
2. 課題の背景
 - 2.1 台湾の民族
 - 2.2 台湾の政治と文化政策
 - 2.2.1 国際情勢
 - 2.2.2 台湾の政情
 - 2.2.3 民主化
3. 先行研究の概観
4. 本研究の目的と方法
5. 調査概要
 - 5.1 調査協力者
 - 5.2 調査の時期と方法
6. 結果と考察
7. まとめと今後の課題

1. はじめに

日本語学習者は日本語能力が中級から上級に移行する段階、母語より日本語のほうが自分の考えや気持ちを表しやすくと感じるほど日本語が上達したとき、自己の意識に直面する。例えば、韓国語より日本語のほうが自然に口に出るようになった韓国人の日本語学習者が、帰国すると自国の友人に「変な韓国語を話す」と言われ、母語とアイデンティティ (identity) について考えるというケースである。

では、台湾（台湾）出身の学習者の場合はどうなのだろうか。台湾島には昔から住んでいた人々、いわゆる先住民（台湾では原住民と呼ばれている）がいるが⁽¹⁾、現在は少数派である。多数派は、中国大陆から移ってきた漢民族の人々と、先住民と混血した漢民族の子孫である⁽²⁾。父方の出自、あるいは国際連合（国連）や日本国政府など政治的な立場から見れば、中国人なのだろうか。台湾の公用語、つまり国語は北京官話に準じる標準中国語である。ところが、台北を走るMRTに乗れば⁽³⁾、中国語・ホロー語（台湾語）・客家語・英語の4言語の車内アナウンスを耳にする⁽⁴⁾。観光名所の国立故宮博物院の至宝は、国民党（國民黨）とともに台湾海峡を渡った

中華文明の偉大なる遺産である。その一方で、台湾では日本語を流暢に話す人々が今も健在で、台北市中で自然な日本語で話しかけられると日本国内にいるかのように感じることもある。このように台湾はアイデンティティの形成される環境が日本と大きく異なり、様相も複雑である。

筆者は、学習者の母語が第二言語の運用に及ぼす影響を社会文化的規範 (socio-cultural norm) に注目し⁽⁵⁾、東南アジアで調査・分析を行ってきた。社会文化的規範はアイデンティティと関連が深い。そこで、本稿は日本語習得の基礎データとして、台湾の若者の意識を形成するアイデンティティを探る。

2. 課題の背景

2.1 台湾の民族

台湾島には第1章で触れたように、中国大陸から漢民族が移住する前から定住していたマレー・ポリネシア系の先住民がいる。先住民は全住民の2%程度で、部族により言語が異なる(菅野, 2011: 9-10)。台湾の住民の大多数を占める漢民族は、移住した時期により内省人と外省人に分けられる。内省人は1945年10月25日以前から台湾に籍があつて居住していた人と、その子孫である。外省人は光復以降に国民党とともに中国大陸から台湾に渡った人と⁽⁶⁾、その子孫である。内省人は17世紀から18世紀にかけて台湾に渡ったホーロー人と、18世紀以降に移った客家人に大別される。ホーロー人は閩南人とも呼ばれ⁽⁷⁾、ホーロー語(閩南語、福建語、台湾語、台語とも言う)を母語とする(クレーター, 2010: 66)。客家人の母語は客家語である。外省人は中国大陸各地から台湾に転入したので、母語は出身地の地方語である。図1は、台湾島に住んでいる人々について民族の割合をグラフ化したものである。

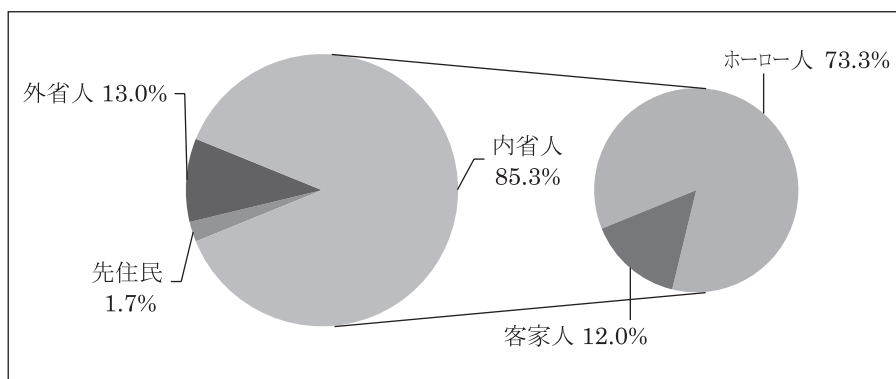


図1 台湾島の住民構成(菅野, 2011より筆者作成)

2.2 台湾の政治と文化政策

台湾においてアイデンティティの考察に欠かすことができないのは文化政策、政策に影響を及ぼすのが政治状況であることは言を俟たないので、台湾をめぐる国際情勢、および国民党の基本政策のターニングポイントを概観する。

2.2.1 国際情勢

1945年の日本敗戦を受けて、台湾は国民党が接收し、現在も中華民国として統治されている。

国民党は中国大陸において共産党との内戦に敗れ、台湾に撤退し、中華民国の本拠地を南京から台北に移した。大陸では1949年に共産党政府により中華人民共和国が成立した。東西冷戦時代にアメリカは台湾島が地政学上重要な位置を占めることから国民党を支援する立場を取り、日本はアメリカの指示により1952年に中華民国と日華平和条約を締結して国交を維持した。ところが、1960年代末にアメリカと中華人民共和国は接近を始め、アメリカは1951年から継続していた台湾への経済援助を1965年に打ち切った（浅野，2010：103）。主要国も中華人民共和国を中国の唯一の合法的政府と認めるようになった。

1971年に中華人民共和国が中国を代表する国家として国連入りすることになり、中国の正統政府を標榜する中華民国は国連を脱退した。1972年に日本、1979年にアメリカが中華人民共和国と国交を樹立し、台湾は国際的に孤立する道を歩むことになった。アジアの冷戦が雪解けに向かうにつれて、台湾と中華人民共和国の国際的地位が逆転したのである（若林，2011：147）。

2.2.2 台湾の政情

1895年日清戦争後に日本に割譲された台湾は、1945年日本敗戦により中華民国に接收された。国共内戦の激化によって台湾の物資は大陸に供出されて台湾経済はインフレが加速し、人々の中華民国への期待は失望に変わった（浅野，2010：91）。1946年に日本語の新聞・書籍の発行が禁止され、日本語で生活し教育を受けた知識人が不満を募らせていた世情を背景に（菅野，2009：225）、1947年にやみ煙草販売者の逮捕に端を発する二・二八事件が勃発した⁽⁸⁾。国民党政権により外省人が弾圧され（井尻，2013：2-3）、1949年から1987年まで台湾全土に戒厳令が敷かれた。

蒋介石の死後、1975年に嚴家淦が副総統から総統に就き、1978年に蒋介石の長男の蒋経国が総統に就任した。蒋経国の下で民主化が進み、それまで非合法であった政治活動が認められるようになり、1986年に民進党（民主進歩黨：the Democratic Progressive Party）が結成した。蒋経国の死を受けて、憲法規定により副総統の李登輝が1988年に総統に昇格し、外省人の総統が初めて誕生した。1996年に直接選挙による総統選挙が行われ、人々の民意を受けて李登輝が2期目を務めることになった。2000年に民進党の陳水扁が選挙に勝利して総統に就任、初めての政権交代が行われた。2008年に国民党の馬英九が政権を奪還したが、2016年の総統選挙に民進党が勝ち5月に蔡英文主席が総統に就く。このように台湾では国民党から民進党、民進党から国民党、再び国民党から民進党へと、直接選挙による3度の政権交代が行われている。

2.2.3 民主化

台湾の民主化は政治面と文化面に見られる。政治面では、1972年に外省人が独占していた政権要職に台湾籍政治家が登用され、「本土化（indigenization）」（現地化つまり台湾化）が始まった（若林，2011：152）。次に、単一文化主義（中国文化）から多元文化主義に転向、換言すれば教

育・文化面での本土化が進められるようになった。蒋介石が推進した儒教的伝統文化（中国文化）の復興「中華文化復興運動」から、1977年に蔣経国が台湾固有の芸術文化・文化資産保存を提唱する「文化建設」に方向転換した（菅野，2011：226-232；294-303）。また、1976年に「維護山地固有文化実施計画」が発表され（陳，1999：25-26）、先住民の文化を重視する兆しも認められる。

台湾では日本が統治する以前は各地でそれぞれの民族の言語が使われており、民族の言語は互に通じなかったが、日本統治下の日本語教育の浸透により民族間で日本語を媒介言語として意思疎通ができるようになり、台湾人としての意識が芽生えたとされている。

しかし、国民党政権下では単一文化の同化主義により標準中国語の普及が推し進められ、台湾人が近代的生活を送るのに不可欠な出版や教育で使用される日本語が排除されるだけでなく（菅野，2012：44）、1987年に戒厳令が解除されるまで民族の言語は方言として抑圧された（松尾，2010：87）。

40年近くに及ぶ抑圧的な言語政策により、1980年代以降、若い世代の第一言語は中国語になり民族固有の言語が話せなくなっていた。母語の喪失は政治上の争点となり、国民党は反体制派對策として1990年のタイヤル族に対する母語教育を皮切りに先住民の言語や客家語などの母語教育を導入した（菅野，2009：227-228）。母語教育は郷土言語教育として教育課程に組み込まれ、2001年には初等教育において義務教育化された（菅野，2006：81）。郷土言語とは母語と同義ではなく地方言語を指す言葉であり、学習には郷土の歴史・地理・芸術等も含むと定義される（菅野，2012：234-235）。この文化伝承を通して、郷土を愛する心情を涵養し、他民族の異なる文化の尊重から民族の融和、そして郷土（台湾）愛と本土意識を高揚する目的があった（菅野，2009：230-231）。

諸外国との断交により、台湾はルーツ探しに向かい民主化の道を歩むようになる。東西冷戦下に西側陣営に組み込まれた国民党政権は、アメリカに支えられて国際社会で「一つの中国」の受益者の立場にあり、統治の正統性を得ていたが（若林，2008：7-8）、アメリカの戦略転換により政権存続の正統性を内部に求めざるを得なくなったというわけである（若林，2011：148-149）。

3. 先行研究の概観

台湾とアイデンティティをキーワードにする議論は、政治学などの社会科学系のほか（井尻，2004；小笠原，2005；陳・徐，2008；浅野，2010など）、歴史学などの人文学系で盛んに行われている（林，2003；黄，2008；菅野，2009など）。

井尻（2004）は、2004年3月に行われた総統選挙で陳水扁が再選されたのは国家のアイデンティティと民族のアイデンティティを台湾の民主改革に結び付け、「台湾人意識」の問題を争点に掲げたことにあると論じている。小笠原（2005）も2004年の総統選挙について、陳水扁の勝因を「台湾アイデンティティ」の積極的活用にあったと、民族的背景に注視しながら得票率を分析している。陳・徐（2008）は、政権与党の交代など政治的变化を、住民意識を形作る「台湾認同

(台湾アイデンティティ)」の角度から考察し、「認同」は重層的なもので、文化的には中国に「認同」を持つが、政治的には台湾に「認同」を持つという意識の人が少なくないと言う。浅野(2010)は、李登輝政権の1999年は台湾人と考える人が35%で中国人と考える人が9%、陳水扁が当選した2000年はそれぞれ37%と9%、陳水扁政権二期目の2004年は43%と7%、馬英九政権が誕生した2008年は45%と4%であり、台湾人と考える人は増大し中国人と主張する人は減少していると述べている。

林(2003; 2014)は、1990年代以降の郷土言語教育は子供に身近な生活や自然を教えるだけでなく、ナショナル・アイデンティティを創出・強化する装置であると論じている。黄(2008)は、台湾意識を歴史に沿って四段階に分けている。第一段階は明清時期で本籍に基づく地方意識、第二段階は日本統治時期で被統治者「台湾人」集団としての民族意識と、被支配階級としての階級意識、第三段階は光復後で省籍意識、第四段階はポスト戒厳期で反中国共産党政権という政治意識で、李登輝の「新台湾人」に象徴されると分析している。菅野(2009)は、国民党の言語政策が中国重視から台湾重視へと変わり、アイデンティティの拠り所を本土化(台湾化)したことが大きい影響を及ぼしている、と言語政策とアイデンティティの関係について説いている。

4. 本研究の目的と方法

台湾の人々のアイデンティティについては、第3章で見たように政治学・歴史学の分野でそれぞれの立脚点から論じられているが、政治行動分析のための世論調査や文献解釈が大勢を占めており、人々が日常生活で普段認識していない意識を直接抽出するような手法は採られていない。そこで、本稿は台湾在住の若者に対してインタビュー調査を行い、アイデンティティをどう捉えているか、彼らの内にアイデンティティはどのように形成されたか、そして今後どのように変容していくかを考える。

5. 調査概要

5.1 調査協力者

本研究は日本語運用時のコミュニケーション能力に関する研究の一環なので、対象は台湾在住の日本語学習者とした。日本語を専攻している大学生、短期間の日本留学の経験がある大学生、日本留学の経験がある社会人である。男性3人と女性5人の計8人で、全員20歳代であった。

5.2 調査の時期と方法

インタビュー調査は2011年10月下旬に行った。調査協力者は互いに初顔合わせだったので、調査会場は台北市中心部にある有名な飲茶店とした。調査協力者は友人が紹介した友人という関係で互いに知り合いというわけではなかったため、自己紹介から始めた。どのお茶が美味しいかなどと話しながら、日本留学時に世話になった先生や共通の友人を懐かしく思い出して、全員が打ち解けた様子になったのを確認してから、半構造的インタビューに入った。

6. 結果と考察

日本、および日本語の学習からアイデンティティに関わることについて、対象者が口にしたことのみをそのまま記す。誰が発言したかということより、何を発言したかということの方を重視するので、発言者別ではなく発言の意味内容に注目して、応答の内容が同様の時は重ねて記さず、異なる場合のみ内容の違いが分かるように行を改めて枝番号を付す。なお、() は筆者が補足した箇所である。

Q1) どうして日本語の勉強を始めましたか。

A1-1) 日本が好きだから。

A1-2) 日本に行きたいから。

Q2) 日本の何が好きですか。

A2-1) マンガ、アニメ、日本製品。

A2-2) 日本の物かわいい。

A2-3) 日本製品はハイクオリティ。壊れにくい。台湾人は日本製品が好き。

Q3) どのくらい日本に行きましたか。

A3-1) 1か月くらい。

A3-2) 1か月行って、台湾に帰ってきて、また日本に行った。

A3-3) 約1年。

A3-4) 3回行った。

Q4) 今も日本語を使っていますか。

A4-1) (大学の) 授業だけ。

A4-2) 仕事で少し使います。

A4-3) 使わない。だんだん忘れる。

Q5) いつも何語を話しますか。家族と何語で話しますか。

A5-1) 中国語。

A5-2) 中国語・・・と台湾語。

Q6) 台湾語は？

A6-1) 台湾語は・・・少し使う。

A6-2) おばあさんは台湾語を話す。私は(台湾語は)聞くだけ、話すは苦手。中国語で話す。

A6-3) 中国語で△△は、台湾語で□□。

Q7) 台湾は中国ですか？

A7-1) う〜ん・・・ 中国じゃない。

A7-2) 中国じゃない。台湾は台湾。

Q8) 台湾の文化と言えは何ですか。

A8-1) 台湾の文化・・・台湾らしいは・・・原住民の文化です。

A8-2) 台湾独特の文化は、原住民の文化です。

Q9) お父さんのお父さんのお父さんのお父さん・・・ご先祖様は中国からいらっしゃったのでしょう。中国は祖国ですか？

A9-1) 中国から来たけど・・・私は中国人じゃない。台湾人。

A9-2) 台湾、台湾人。

Q10) ご先祖様は中国のどこから来ましたか。

A10-1) 分からない。

A10-2) 知らない。

A10-3) (無言)

日本語の勉強を始めたきっかけとして、「マンガ」や「アニメ」などサブカルチャーのほか、ユーザーとしての「日本製品」に対する信頼が挙げられた。日本留学の期間は1か月から1年、来日回数は1回から3回までと幅があった。台湾に帰っても日本語を使っているのは日本語専攻の大学生と日系企業の社員であるが、日本語を使っていなくてもマンガやアニメを通して日常的に日本語に接しているようである。ハーリー族（哈日族）と言えるだろう⁹⁾。日本の大衆文化やメイド・イン・ジャパンに愛着を持っているという話の中で政府や国民党に対する批判的な発言が出たので、協力者の出自について尋ねたら全員が閩南系の内省人であった。

日本留学から日本語に話題が流れたのを受けて言葉について家庭ではどうかと質問したら、全員が「中国語で話す」と応えた。その中に、口ごもって「台湾語」を付け加えた協力者がいたので、台湾語について尋ねたら、「おばあさんは台湾語を話す」が「私は（台湾語は）聞くだけ、話すは苦手。中国語で話す」とのことだった。中国語と台湾語の違いを筆者に理解させるために、その協力者の友人が単語レベルで中国語と台湾語を聞かせてくれた。内省人なら家庭で使う言葉は中国語ではなく民族の母語だろうと推測されるが、予想に反して全員が中国語を使うと応えた。台湾の人々はホーロー語や客家語など一つの地域言語の能力をある程度持っていると報告されている一方で（クレーター, 2010 : 67)、国民党は中国語を普及させるため民族の言語を方言として抑圧したので、若い世代の第一言語は中国語になり民族固有の言語が話せなくなったとも言われている（菅野, 2009 : 227)。本稿のインタビュー調査において若者は民族の言語（台湾語、つ

まりホーロー語)を自由に操れないことが判明し、菅野(2009)の説を裏付けることになった。国民党の中国文化同化政策が強力に推し進められた結果、若者の母語は中国語に取って代わられたのである⁽¹⁰⁾。

協力者が日常的に中国語を話すことを確かめたので、次に台湾は中国の一地方かと尋ねてみた。ある協力者は少し考えてから「中国じゃない」と否定発言をし、またある協力者は慎重に言葉を選んで「台湾は台湾」と声にした。二人の発言を聞いた誰もが、その判断を支持して肯いた。インタビューの応答より、協力者の政治的なアイデンティティの拠り所は中国ではなく台湾であることが看取された。

さらに、文化レベルはどう捉えられているかを確認するために台湾文化について質問を続けたら、台湾独自の文化は「原住民の文化」という言葉が返ってきた。中華民族の血を引き台湾のマジョリティを占める内省人が、マイノリティである「原住民の文化」こそが台湾文化だと公言したことを理解するには、国民党の文化政策が蒋介石の「中華文化復興運動」から蔣経国の「文化建設」へ舵を切り、民進党が政権与党になった政治的背景と、その時点を念頭に置く必要がある。文化政策が台湾固有の芸術文化・文化資産保存に方向転換したのは、1977年であった。母語教育が教育課程に組み込まれ、必修科目の郷土言語教育が採り入れられたのは、1996年であった。郷土言語教育は、文化伝承を通して郷土を愛する心情を涵養し、異なる文化の尊重から民族の融和、そして郷土(台湾)愛と本土意識を高揚する目的があった(菅野, 2009: 230-231)。調査協力者は20歳代なので、文化政策が方向転換した後の学校教育を受けた世代である。東西冷戦の雪解けに見られる国際情勢の変化を受けて、国民党は政権存続の正統性を喪失し民主化を余儀なくされ、文化・教育政策もコペルニコスのように転回した。2000年に政権に就いた民進党は中国に対して自主路線を採るため、もともと台湾にしかいなかった先住民を政治的リソースと捉え、2005年に原住民族基本法を制定して9民族を認定している(笠原, 2012: 45)。中国と異なる台湾社会の独自性を主張する論拠に、台湾史で「日本植民地時代の歴史的体験」が後世に伝えられるべきこととされ、「台湾における先史時代の登場」や「原住民に起点を持つこと」等により台湾独自の歩みを示して、「台湾の中に郷土がある」という郷土意識を学校教育で形成したのである(林, 2003: 113-115)。台湾独自の文化は「原住民の文化」と説明した協力者の回答は、政情の変化とその影響下にある教育政策の効果、優等生的発言であることが分かる。

内省人は光復以前に渡台した漢民族の子孫なので、祖先の出身地に望郷の念があれば中国を祖国と考えるだろう。ところが、祖国についての回答は「私は中国人じゃない」「台湾人」だった。最後に、先祖は中国のどこの出身かと尋ねたら、「わからない」「知らない」と首をかしげ、家族の歴史、系譜については関心のない様子だった。わずかに知っていることは、閩南系の家系だということだけだった。

7. まとめと今後の課題

本稿の調査より、台湾在住の若者のアイデンティティの拠り所は、政治的にも文化的にも台湾

であることが分かった。陳・徐（2008）は台湾人の意識は重層的で、政治的には台湾に、文化的には中国にアイデンティティを持つ人が多いと分析している。よって、本稿の調査結果に限れば、陳・徐（2008）を政治的アイデンティティに関しては支持するが、文化的アイデンティティに関しては支持しない。

台湾の若者が文化的にも台湾にアイデンティティを持っているという調査結果は、文化政策転換後の多文化主義教育を受けた若い世代が新たなアイデンティティを構築し、その教育成果の具現であろう。したがって、本稿は、郷土教育はナショナル・アイデンティティを創出し強化する装置であると説く林（2003；2014）、文化政策によりアイデンティティの拠り所が台湾に変わったとする菅野（2009）の論を支持する。

郷土教育が採用されたのは、国民党の政策が中国への同化を推進する単一文化主義から台湾を重視する多元文化主義へと転向したからである。国民党の本土化は民主化への流れを進め、台湾の人々のアイデンティティは井尻（2004）・小笠原（2005）が分析するように、政治の争点の一つで注目されてきた。本稿の調査で明らかになったように、これからの台湾社会の中心層を成す若者は政治的にも文化的にも台湾にアイデンティティを持っており、政権交代しても傾向は変わらないとする浅野（2010）の言に一致する。2016年の総統選挙で「現状維持」を表明した蔡英文の勝利は民意の反映であり、この基調は続くと考えられる。よって、「多文化主義教育」から来た若者のアイデンティティは、本土意識を持った「台湾人」に行くと言えよう。

黄（2008）が論じる台湾意識の第四段階は「新台湾人」であった。これについて李登輝は1998年に「この土地とともに成長し、生きてきたわれわれは、先住民はもちろん、数百年前あるいは数十年前に来たかを問わず、すべてが台湾人であり、同時にすべてが台湾の真の主人であります。」と演説し、1999年に『台湾的主張』で「台湾に住んで、心が台湾に根差し、台湾のために犠牲を払い奮闘することも厭わない者は、みな『新しい台湾人』に他ならない。」と述べている（黄，2008：28-29）。中国文化同化政策の下で教育を受けた世代に対しては「新台湾人」を提示して民族間の融和を図ることにより、未来を切り開く若い世代に対しては多文化主義教育を通して台湾への郷土意識を育てることにより、台湾にアイデンティティを持つ人々が台湾社会の本流となることは間違いないだろう。

本稿は台湾在住の日本語学習者の基礎データを探るために、社会文化的規範と関わりが深いアイデンティティについて予備調査を質的に行った。少数事例の探索的な調査で民族をコントロールしていないので限界は否めないものの、インタビューにおける応答から、少なくとも郷土教育が調査に協力してくれた若者のアイデンティティ形成に影響を与えていることが看取できた。本稿の調査で明らかになったように、家庭でも中国語を話す若者が増えている現状から郷土教育に対して母語の保持の面で批判的な見方もあるが、郷土（台湾）愛と本土意識の高揚において確かな効果が認められよう。

郷土教育で台湾の歴史として「日本植民地時代の歴史的体験」を肯定的に教えられた人々は、そうでない人々と比べて、日本人・日本語に対する印象が根本的に違うであろう。印象の違いは、

思想・行動の基底や社会文化的規範に異なりを自ずと生じさせる。目標言語である日本語について学習者の価値観や信条が前向きであれば、日本語習得にプラスに作用するはずである。今後は、この点に留意して研究を進めていきたい。

注

- (1) 「原住民」は日本語の文脈では差別的な意味合いが感じられるが、台湾では文字どおりの「もと(原)から住んでいた民族」の意で使われている。戒厳令解除後の民主化により、先住民は押し付けられた名称「山胞(山地同胞)」を廃して「原住民」と呼ぶように求め(笠原, 2012: 43)、中華民国憲法で1994年に「原住民」、1997年に「原住民族」と記された(笠原, 2012: 33)。
- (2) 1624年にオランダが台湾を支配し組織的な移民を開始してから清朝の渡台禁止令が廃止される1760年まで、台湾に渡った漢民族は男性の労働者だけだったので、先住民の女性と結婚した(浅野, 2010: 20-29)。これにより、先住民の血を引く人々が誕生し、漢民族の子孫と言われているものの、大陸の中国人と遺伝子を異にする台湾人が拡大の一途を辿る。
- (3) MRTは英語表記Mass Rapid Transitの頭文字で、漢字では台北捷運と表記されている。MRTは道路上の高架走行も一部分あるが、台北市内主要エリアでは地下を走行している。2000年に「大衆運輸工具播音語言平等保証法」が公布され、「公共交通機関のアナウンスに『国語、閩南語、客家語』の使用が義務付けられた」(菅野, 2012: 261-262)。
- (4) ホーロー語は台湾で一般的には台湾語と呼ばれている。台湾へ移住した人々とともに中国福建省南部で話されていた閩南語が台湾へ渡ったので閩南語とも呼ばれるが、現在の福建省の閩南語と同じではないとされている。他方で、客家出身の台湾人からは台湾で使われている言語はすべて台湾語であるという主張も聞かれる(田上, 2007: 171; 菅野, 2012: 261)。よって、本稿は引用、及びインタビュー調査で「閩南語」「台湾語」と表現された場合はその意向を尊重するが、基本的にはホーロー語を用いる。
- (5) 学習言語(目標言語)はそれが学習者の居住地で使用されているかどうかで区別され、居住地で使われている場合は第二言語、居住地で使われていない場合は外国語と呼ぶ。この定義によれば、日本滞在の外国人が話す日本語は第二言語である。
- (6) 光復とはirredentismの中国語訳で「異民族統治の暗い時代から祖国統治の明るい時代へ戻った」という意味であり、1945年10月25日に台湾が日本の植民地を脱したことを言う(何, 2014: 10)。台湾では10月25日は光復節として祝日に制定されている。
- (7) 閩南人という名称は国民党政権によって付けられたもので、本来あるべき名称ではないと考える人がいるので(田上, 2007: 173-174)、本稿ではホーロー人を用いる。
- (8) 二・二八国家記念館には法曹人など台湾出身の知識人が大量殺戮の対象にされた展示があり、国民党による白色テロが行われたことを現在に伝えている(若林, 1992: 14-15; 黄, 2008: 34; 何, 2014: 226-228)。記念館を訪れた際、筆者はボランティアガイドから事件に関して日本語で解説を受けた。
- (9) 哈日族は、日本製品やサブカルチャーなど日本的なものを愛する台湾の人々のことである。
- (10) 台湾北部地域は他の地域に比べて民族の混交が進んでいるので母語ができない台湾人の割合が高いこと、学歴社会で競争に有利な中国語を家庭で使う傾向もあることが報告されている(菅野, 2012: 223)。本稿のインタビュー調査協力者の居住地は台北市内とその周辺地域であった。

引用文献

- 浅野和生(2004)「陳水扁総統の再選と台湾人アイデンティティ」『問題と研究: アジア太平洋研究専門誌』第33巻, 第8号, pp.41-61.
- 浅野和生(2010)『台湾の歴史と日台関係』早稲田出版
- 陳元陽(1999)『台湾の原住民と国家公園』九州大学出版会

- 陳芳明・徐宋懋 (2008) 「台湾アイデンティティの本質とは何か」『世界』第785号, pp.231-239.
- 井尻秀憲 (2004) 「陳水扁再選で自立化する台湾」『問題と研究：アジア太平洋研究専門誌』第33巻, 第8号, pp.1-28.
- 井尻秀憲 (2013) 『激流に立つ台湾政治外交史：李登輝, 陳水扁, 馬英九の25年』ミネルヴァ書房
- 何義麟 (2014) 『台湾現代史：二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社
- 笠原政治 (2012) 「台湾の原住民にとっての国家」加藤隆浩『ことばと国家のインターフェイス』行路社, pp.33-53.
- 黄俊傑 (2008) 『台湾意識と台湾文化：台湾におけるアイデンティティの歴史の変遷』東方書店
- クレーター, ヘニング(著) 藤田美佐(訳) (2010) 「台湾における言語編成の変遷：イデオロギーと効果」
ハインリッヒ, パトリック・松尾慎(編著) 『東アジアにおける言語復興：中国・台湾・沖縄を焦点に』三元社, pp.63-83.
- 林初梅 (2003) 「1990年代台湾の郷土教育の成立とその展開」『東洋文化研究』第5号, pp.91-119.
- 林初梅 (2014) 「台湾に現れた三つの郷土教育：郷土探し, そして植民地時代の『遺緒』との出会い」
中京大学社会科学研究所, 檜山幸夫(編) 『歴史のなかの日本と台湾：東アジアの国際政治と台湾史研究』中京大学社会科学研究所, pp.195-221.
- 松尾慎 (2010) 「台湾における『郷土語言教育』の実態：台中市と新竹縣の公立小学校における調査より」
ハインリッヒ, パトリック・松尾慎(編著) 『東アジアにおける言語復興：中国・台湾・沖縄を焦点に』三元社, pp.85-109.
- 小笠原欣幸 (2005) 「2004年台湾総統選挙分析：陳水扁の再選と台湾アイデンティティ」『日本台湾学会報』第7号, pp.44-68.
- 菅野敦志 (2006) 『台湾語を媒介とした国語教育』再考：戦後初期台湾における言語政策の一断面
『日本台湾学会報』第8号, pp.67-87.
- 菅野敦志 (2009) 「台湾における『本土化』と言語政策：単一言語主義から郷土言語教育へ」『アジア太平洋討究』第12号, pp. 223-249.
- 菅野敦志 (2011) 『台湾の国家と文化：「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』勁草書房
- 菅野敦志 (2012) 『台湾の言語と文字：「国語」・「方言」・「文字改革」』勁草書房
- 田上智宜 (2007) 『「客人」から客家へ：エスニック・アイデンティティの形成と変容』『日本台湾学会報』第9号, pp.155-176.
- 若林正文 (1992) 『東アジアの国家と社会2 台湾：分裂国家と民主化』東京大学出版会
- 若林正文 (2008) 『台湾の政治：中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会
- 若林正文 (2011) 『『中華民国台湾化』の展開：台湾における『七二年体制』下の政治構造変動』和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真(編) 『岩波講座 東アジア近現代通史第9巻 経済発展と民主革命1975-1990年』岩波書店, pp.147-165.

付記

本稿は、平成23年度～平成25年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「アジアの言語のポライトネス：台湾人の場合」（課題番号：23520641）の助成を受けて行った研究成果の一部で、ICJLE2014日本語教育国際研究大会（University of Technology, Sydney）での発表に加筆修正を大きく施したものである。名古屋外国語大学の尾崎明人先生をはじめとして会場で貴重なアドバイスをくださった先生方に厚くお礼申し上げます。

受理日 平成28年3月30日